

観念論と唯物論（続・完）

——影山秀夫氏のチュチュ思想批判について——

井 上 周 八

はじめに

- 一 チュチュ思想とマルクス・レーニン主義の関連についての影山氏の批判とその検討
- 二 哲学的原理に対する影山氏の批判とその検討
- 三 人間の本質についての影山氏の批判とその検討（以上前号）
- 四 チュチュ思想の社会・歴史観に対する影山氏の批判とその検討
- 五 チュチュ思想は観念論か
- 六 チュチュ思想における「支配・奉仕のシエーマ」について
- 七 チュチュ思想は共和国における唯一の思想体系であり、金日成主席は人民に君臨し、個人崇拜されているという影山氏の批判について

四 チュチュ思想の社会・歴史観に対する影山氏の批判とその検討

影山氏所説で問題とすべき第四の点は、チュチュ思想の社会・歴史観批判である。氏は以下のように述べている。
『主体思想について』は次のように述べている、『チュチュ思想によって明らかにされた社会・歴史原理は新しい

社会・歴史観、チュチュエ史観であります。このように、唯物史観に代えてチュチュエ史観が提唱される。……

まず、次のようにチュチュエ史観の独自性が宣言される。『マルクス主義は、社会も自然と同様、物質世界に属し、物質世界の一般的合法則性にしたがって変化・発展することを説明して、社会と歴史にたいする觀念論的見解を打破しました。これにたいして、『チュチュエ思想は、社会と歴史に作用する物質世界発展の一般的合法則性を認めるとともに、社会と歴史に固有の合法則性を説明しました。労働者階級の社会・歴史観の完成におけるチュチュエ思想の重要な功績はここにあります』。

マルクス主義、すなわち科学的社会主義の哲学についてのこの叙述は正しいだろうか。それは、決してここで書かれているように、たんに、社会も、自然と同様に物質世界にぞくするものとして、物質世界の一般的合法則性にしたがって変化・発展することを説明するにとどまるものではない。もちろん、自然の歴史的發展のなかで、地球上で、労働を介して、猿から人間へと転化することによって社会が形成されたのであり。その点では、社会の存在とその発展は、自然の存在とその発展と法則的に不可分な連関にある。科学的社会主義の哲学はこのことを確認している。しかし、それが明らかにしたのは、決してこれにとどまらず、次のことが基本的に重要である。人間の社会は、——自然の壮大なスケールの歴史的發展のなかで形成されてきた運動諸形態の階層的構造における質的にまったく新たな階層をなすものとして——独自の運動・発展の法則をもつものであり（したがって、さきの引用の言葉によれば『社会と歴史に固有の合法則性』をもつものであり）、この社会とその歴史的發展についての唯物論的な把握として唯物史観、いいかえれば史的唯物論が形成されたのである。ついでに念のためにいえば、そのさい、唯物論的な世界観（哲学）なしに唯物史観が成立したのではなく、唯物論的歴史把握＝唯物史観（史的唯物論）の確立と密接不可分に弁証

法的唯物論が成立したのであり、後者は前者をそれ自身の核心的契機として含んでいるのである。この意味で、唯物史観は科学的社會主義の哲学のケルン（核心）をなしている。

それゆえ、科学的社會主義の哲学は、決して、社会も、自然と同様に、物質世界の發展の一般的合法則性にしたがって變化・發展することを説明しただけではない。さきの引用文にあるように、チュチュエ思想がはじめて『社会と歴史に固有の合法則性を説明』したわけではないのである。これはあまりにも簡単な誤解、というよりかむしろ無理解、いやむしろ極端な曲解である。さきの引用が主張したいのは、あえていえば、おそらくじつは、チュチュエ思想こそが、世界とその變化・發展にたいする人間の側の、チュチュエの立場を闡明したのであり、だからして『固有の合法則性』を発見したということなのであろう。だが、チュチュエ思想では、このことについて何も科学的な法則を説明しておらず、たんにそう断言するだけである。そればかりか、さきにみたように、チュチュエ思想における、存在にたいする意識の能動性、決定性の一面的な強調と、そこからさらにすすんで力説される、人間を世界の唯一の支配者とみる、支配奉仕の観点などは、はなはだしい人間・意識中心的な見方であり、主観主義的なものと考えざるをえないのである。』（一八二—三ページ）

「ともあれ、チュチュエ史観の基本的内容はこういうものであるうか。著作はつづけて述べている。『歴史の主体は人民大衆であり、社会的・歴史的運動は人民大衆の自主的・創造的運動であり、革命闘争において人民大衆の自主的な思想・意識が決定的役割を果たすという社会・歴史原理は、チュチュエ史観の基本的内容をなします』。たんにこれだけが書かれている。

この引用文のうち、『歴史の主体は人民大衆であり、社会的・歴史的運動は人民大衆の自主的・創造的運動であ

る』という部分は、書かれているかぎりでは、同意しうるだろう。とはいえ、人民大衆が歴史の創始者であるということは、科学的社会主義のそもそもの基本的見地であり、なにも新しいことではない。」（一八三—四ページ）

右の影山氏のチュチュエ思想批判は、要するにチュチュエ思想は、チュチュエ史観こそがマルクスの唯物史観にかわるものであり、チュチュエ史観によって社会と歴史に固有の合法則性が初めて解明されたと主張しているが、それは誤りであること、またチュチュエ思想は存在にたいする意識の能動性、決定性を一面的に強調しており、革命闘争において人民大衆の自主的な思想意識が決定的役割を果たすことが強調されているが、このことは科学的社会主義のそもそもの基本的見地であり、何も新しい見解ではないという反論である。

しかし影山氏のチュチュエ史観批判はここでもまた一面的である。なぜなら自然的運動と区別される社会的運動を、その運動の物質的担当者の固有の性質と直接結びつけず、物質一般の見地から解明しようとするのはその限りでは誤りだからであり、社会的存在である人間は、環境に順応し、環境と調和して生きるだけではなく、それを改造し、支配しながら生きる自主的存在という点で、他のすべての物質的存在と決定的に区別されるのであるからこの点を強調することは何ら一面的ではないからである。自然的運動と区別される社会的運動は自然的改造・社会的改造・人間改造の三つに大別できる。

人類の自然との闘争は、勿論人類の発生とともに、はるかなる昔より行われてきた。過去、人間も他の動物と同様に自然に対して受動的に対応し、本能的に生きてきた。自己を保存し種を保存するという本能に従って生きるという点では他の動物とまったくかわらない存在であった人類の祖先はやがて、進化の結果、他の動物とくらべて生物学的にもっとも発達した頭脳の所有者となり、この発達した肉体を前提として長い年月を経て自然に能動的に働きかける

自主的、創造的、意識的な社会的存在、すなわち人間に転化した。人類は、その当初より群をなして生活し、一定の協力関係を発展させてきたが、彼らの闘争はまず自然との闘争であり、この過程で、他の動物の本能的な協力関係とは異質な、目的意識的な協力関係をきずき発展させてきた。こうして目的意識的な協力関係のもとで、自然に働きかけ、自然と闘いながら人間はその自主性と創造性、意識性を長い年月をかけて次第に発展させてきたのである。

人類が無階級社会を経て階級社会へ移行したのは、勤労人民大衆は自然との闘争に加えて社会内部における支配階級との闘争を行わざるをえなかった。こうして人民大衆は歴史の主体として自然改造と社会改造を行なう過程で社会と自己自身を発展させてきたのである。

したがってチュチュエ史観は、徹底して人民大衆を歴史のの主体としてみ、歴史を人間の自主性と創造性と意識性の発展とみる点において、それ以前の歴史観と区別される特質をもったのである。

チュチュエ思想は世界にたいする見方、立場、方法の全一体系であり、その哲学的原理、物質観、人間観、社会・歴史観は内的に不可欠に統一されている。したがって、チュチュエ思想の断片的理解に止まっただけは、ましてやその曲解では、その真髄を理解することはできないであろう。

遠山氏がチュチュエ思想を批判の材料としてではなく、総合的に全体的に学ばれたならば氏のような批判が成立し得ないことに気付かれたであろう。

まず第一にチュチュエ史観は唯物史観を否定し、それにとって代わろうとする見解であるという影山氏の解釈は正しくない。

チュチュエ史観は唯物史観を継承し、その歴史的な功績を高く評価したうえで、唯物史観を人間中心のチュチュエの哲

学的原理に依拠して深化・発展させているからである。

金正日書記は、チュチェ思想の社会・歴史原理について次のように述べている。

「社会的歴史的運動は、自然の運動とは区別される固有の合法性をもっています。もちろん社会的運動も物質的運動という点では自然の運動と共通性をもっています。社会的運動にも物質世界の一般的法則が作用します。しかし自然の運動には主体がありませんが、社会的運動には主体があります。自然の運動は客観的に存在する物質の相互作用によって自然発生的になされますが、社会的運動は主体の主動的な作用と役割によって生成發展します。」〔チュチェ思想について〕

社会歴史の發展過程を、右のように目的意識的な主体の運動過程としてとらえたところに、チュチェ史観の獨創性がある。

マルクス主義は、觀念史観に反対し、社会の發展を生産力と生産關係の矛盾によって、自然史的過程として説明した。マルクスは『経済学批判』序言のなかで、「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」、「新しい、さらに高度の生産諸關係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されおわるまでは、けっして古いものにとって代わることはない」と述べている。

だが、歴史は右のマルクスの命題を、資本主義から社会主義への移行にあたっては否定した。社会主義革命は資本制的生産力が低くても主体的力量が優れた国で成功した。その例証はレーニンのおける社会主義革命の勝利である。したがって社会的歴史的運動を主体の運動とみるチュチェ思想の見解の正当性は明白である。しかしではマルクスの唯物史観は誤りかといえそうではない。マルクスが宗教的な社会・歴史観や、ヘーゲルの絶対精神の自己

展開として歴史の發展をとらえる觀念史觀に反對して、弁証法的唯物論にもとづく唯物史觀を確立したことは不滅の功績であつた。そしてこの唯物史觀を前提として、チュチェ史觀は發生しているのである。つまり勤勞人民大衆は自然史的過程としての歴史の發展を認識することができたことにより、主体的に歴史を發展させることが初めて可能となつたのである。「自由とは認識された必然である」といわれているように、自然史的過程としての社会發展の法則の把握を前提としてのみ、主体的なチュチェ史觀の誕生が可能となつたのである。

マルクスは、周知のように生産力と生産關係の問題をみる場合も、主觀的要素を介入させず、自然史的過程として客觀的に説明していた。また生産力が内容で、生産關係は形式であるとみてもいる。なるほど生産力と生産關係にそのような關係があるとは言える。しかし生産力と生産關係を内容と形式の關係とみることに止まらず、さらに人間の關係としてみなければならぬのではなからうか。たとえば生産力が發達すると、この發達した生産力を行使する人間が必要となり、そういう人間を教育することも必要となり、教育制度の充實も問題とならう。また生産力が増大し、生産物が増大すれば、それをどのように分配するかという問題が提起される。このように生産力が發展すれば、ただちにそれは人間との關係で問題とならざるをえない。そして生産力は人間と自然との關係の問題であるが、人間と人間との關係の問題は生産力の問題ではなく、生産力はこれを解決できず、政治力がこれを解決する。このことをみても生産力を内容とし、生産關係を形式とする見解だけでは不十分である。あくまで、ここでも、人間の能力とその利害關係の問題を基本に考察しなければならないのである。大きくみるならば、生産力と生産關係が内容と形式の關係にあるといつてもよいであらう。しかし、このような見解は問題解釈の上で何ら有用ではない。生産力が内容で、生産關係が形式であるというのは、この兩者の關係についての最も一般的な説明であり、それはあたかも人間は

物質であるというのと何らの変わりもない。最も発達した人間と物質一般との関係を最も一般的な関係で表現するだけでは意味がない。人間と物質の関係で一番大切なことは、人間が最も発達した物質として、その自主的・創造的要求を意識的に貫徹するため他の物質を改造し支配しているということである。自己の利益を自己の創造力で実現しようとするのが、人間にとって最も重要なことである。それゆえ人間と自然の関係を問題とする場合、あくまでも人間を基本にし、人間の本質に関連してこれをみなければならぬ。

マルクス主義も人間を前提にしている哲学であることは勿論である。しかし人間を前提にしていなかったであろうが、人間の本質を正しく規定した前提のもとで、人間を主体とし、人間を中心として歴史の発展をみる点の強調には欠けていたと言わなければならない。

例えばマルクス主義唯物史観では、物質的富を生産する人間の活動である自然改造を社会生活の究極的基礎と位置づけているので、政治や思想・文化の発展、社会改造や人間改造をすべて物質的富を生産するための自然改造を基礎として考察した。これに対してチュチュの社会・歴史観は、自然の主人たらしめる人間の要求を実現する自然改造、社会の主人たらしめる人間の要求を実現する社会改造、古い思想と文化の束縛から脱し、自分自身の主人たらしめる人間の要求を実現する人間改造を等しく社会的運動の独自の形態として認め、この三つの改造が、相互作用する密接な関係にあるとみるのである。そしてさらにチュチュの社会・歴史観は、自然改造や社会改造の直接の担当者がまさに人間であるので、人間改造——とくに思想革命——を他の改造に優先させることが社会発展の法則であると主張するのである。

そもそも人間と世界の関係問題は世界観の根本問題である。現在、人間は物質世界発展の最高の産物として物質世

界發展の高さを代表し、その發展方向と推進力を代表している。それゆえ世界における人間の地位と役割を説明することなしには、世界の眞の姿を明らかにすることはできない。人間は世界で主人の地位を占めており、世界を改造し發展させるうえで決定的な役割を果たしている。まさにこのことを理解することこそチュチュ思想を理解するための核心である。

前稿でもみたように、チュチュ思想は人間を中心に据えて哲学の根本問題を提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を確立した。

世界にはいろいろの哲学、世界観があるが、それらの哲学、世界観はそれぞれにその哲学的原理をもっている。そして、ある哲学が何を根本問題としていて、その根本問題にどう答えたかによってその哲学の価値は決まる。

マルクスの唯物史観は、周知のように社会的存在が社会的意識を規定する面を説明したものであるが、しかし社会的存在が社会的意識を規定することの解明にとどまっていたなら、自然的存在と区別される社会的存在の本質の全面的な解明とはならない。社会的存在が社会的意識を規定するというのは、物質が意識を、存在が思惟を規定するという原理の延長であるから、自然的存在とを区別される社会的存在の本質的特徴がなにかということについては、まだ立入った解明を与えていないのである。

社会的存在がなんであるかを明らかにするためには、社会的存在と自然的存在との共通性と相異性を解明しなければならぬ。

マルクス以前の観念論者たちは、社会的存在が自然的存在と区別される相異点だけを誇張して強調し、かつそれを神秘化してきた。このような観念論を打破するために社会的存在と自然的存在との共通性を強調するのは有意義であ

り、必要なことであった。しかしそれだけではなく社会的存在がなにかということを明らかにするためには、社会的存在と自然的存在の相異性をも明らかにし、そのような相異性が、まさに、他の一切の物質的存在と社会的存在との物質的存在の發展上の質的相違の結果であることを解明することが必要だったのである。この点を解明することこそ社会的存在という新しい物質的存在を發展の見地から弁証法的に解明するということなのである。

社会的存在が社会的意識や上部構造を規定するという理論によって、人々の社会的意識や上部構造は下部構造Ⅱ土台である生産関係の反映であり、社会的意識や上部構造がふたたび生産関係に反作用する側面はあるとしても、結局は生産関係によって規定されると言う一面的な主張は、社会的意識が社会的存在によって規定されるという点での正しさは認めるとしても、なおかつマルクスの見解を正當に把握することのできないところの一面的見解である。

意識が存在によって規定されることを認めたうえで、人間という意識をもった社会的存在が主体的に働きかけることを認識しなければならない。

マルクス自身も歴史の發展を自然史的過程として把握して觀念史觀を斥けただけではなく、さらにプロレタリアートによる社会主義共產主義社会の実現を目指して主体的な運動を展開し、第一インターナショナル（労働者教育協會）を結成し、「万国のプロレタリアート団結せよ」と呼びかけ、その生涯を階級解放、民族解放のたたかいに捧げたのである。すなわちマルクスは社会・歴史の發展過程を自然史的過程として把えると同時に社会歴史的運動は主体の運動であらとして実践したのである。^(注)

（注）労働者階級の卓越した指導者であるマルクスとエンゲルスは科学的共產主義思想を一八四〇年代に創始した。そして科学的分析にもとづいて人民大衆の進むべき方向を明らかにするため『資本論』を長い年月をかけて執筆した。

労働者階級に対して、資本主義的生産關係は、彼らにとって有害なものであり、労働者階級に有利な生産關係は社会主義的生産關係であることを科学的に解明したことはマルクスの偉大な人類への寄与であった。労働者階級の自覚は、生産關係の反映として、自然發生的に生じるものではなく、労働者階級が資本主義的生産關係に反対する闘争の過程で得た多くの経験と、階級闘争と社会發展の過程についての科学的認識にもとづいてのみ到達することができる。

マルクスの『資本論』は、資本主義社会の運動法則を暴露し、この社会が社会主義社会と交替しなければならない必然性を明らかにしたのであり、マルクスの他の著書と同様に資本主義打倒のためのプロレタリアートの理論的・思想的な武器となった。

マルクス主義の出現により、労働者階級は階級社会に終止符を打ち、人類の理想社会を建設する自己の歴史的使命を自覚した自主的な階級となった。こうしてすでに多くの国で、労働者階級の指導のもとに人間による人間の搾取と抑圧が永遠に一掃された人民大衆の新しい社会が建設されている。そしてまだ人民が政權を獲得できないでいる多くの国々でも何らかの形で労働人民の声が支配階級に大きな影響を与えつつある。

そもそも人間は環境や客観的条件に支えられ、ただそれらに順応して生存するのではない。人間は自らの自主的で、創造的で、意識的な活動によって、自己の要求に適合しないものを自己の要求に合致するように改造し、古くて反動的なものは新しく進歩的なものに改造、変革しながら、自然と社会とそして自分自身を絶えず發展させる。

しかし人間が自主的存在であるといっても、決して人間が環境からいかなる制約も受けずに意のままに活動できるものでないことはいうまでもない。環境が人間の活動を制約することは明白であるが、問題は、人間が環境を自分の要求に即して改造する面を基本とみるのか、または環境が人間の活動を制約する面を基本とみるのか、あるいはこの両方を同等にみるのかという点にある。環境が人間を制約する面を基本に見るとか両方を同等に見るのは、いずれも人間の自主性を強調しない見解である。人間を自主的存在として見るということは、環境が人間を制約する面もある

が、主要な側面は人間が環境を改造し支配する側面であることを認めることである。

人間はまさに、環境との相互作用において、環境によって制約される側面もあるが、それはあくまでも副次的側面であり、人間が環境を改造し、それを支配しつつ生きていく側面が主要な面である。そしてこのことから人間は自主的な存在であるということがきるのである。物質と環境の関係においては、人間よりも展覧水準の低い生物の種^(注)にあつてすらも環境にたいする物質そのものの優越性をみることができ。

(注) 生物学の面でのソ連のルイセンコ学説の誤りは、この点に関するものであった。ルイセンコは種は形式で環境は内容であるとした。しかしこれは誤りである。種と環境との関係においては、やはり種が主体であり、内容であり、環境は形式であり、外的条件であるとみるべきである。もちろん種は環境の支配をうけるが、それでも種は発達した物質である。ルイセンコ学説は遺伝子を認めなかったが、それは種は形式で環境は内害であるという誤った考えによつてであつた。また植物は同化作用を行ない、自己を環境に同化させながら進化する。この意味でも種は環境に比べてより主体性をもっている。まして人間の場合は、目的意識的に自然を能動的に支配する社会的存在である。

したがつて社会的存在である人間と自然との関係において、自然が人間の生活を制約する重要な要因になることは明白であるが、しかし、人間が自然を支配するのか、自然が人間を支配するのかと問題を立てるならば、人間が自然を支配すると答えるべきである。人間が動物の状態に近かつた過去にさかのぼればのぼるほど人間は自然の束縛をより多く受けていたのであり、今後社会が発展すればするほど、人間はますます自然の束縛から脱け出て、自然にたいする自己の自主的な能動的な地位をさらに拡大し強化して行くのである。人間も自然の法則に依拠しなければ自然を改造することができないが、人間は自然の法則に従属して生活するのではなく、その法則を自己の要求に即して利用し、自然を自己の生活に役立たせるのである。自然環境は人間の活動に有利な条件にも不利な条件にもなるので、人

間はその活動を展開するにあたって自然的条件を考慮せざるをえない。

しかし、人間の活動を直接制約する要因は、自然を改造する人間の創造的力であり、社会の創造力の発展水準である。自然を改造する人間の創造的力である生産力の発展程度によって、自然における人間の地位が規定される。結局、自然との関係において人間は、自然的条件に依存することにより、自分自身の創造的力に依拠しているのである。

人間と自然との相互関係を考察するうえで注目すべきことは、人間は自然に対して孤立した個人として対応するのではなく社会的存在として対応するということである。

自然を改造する創造力である生産力には、人間がその体に体现している労働力だけでなく社会的歴史的に発展させてきた労働用具をはじめとする一切の生産手段が含まれるのであり、またそれらは一定の社会的協力関係のなかで作る用するのである。したがって人間と自然環境の相互関係問題をみる場合には、人間と自然との関係だけでなく、人間と社会における物質的・文化的富とその社会的結合関係を問題としなければならない。

社会的運動の主体は社会という存在それ自体であり、自然はただその環境としての意義をもつにすぎない。したがって自然の法則が社会の運動を規制する法則にはなりえないのである。社会の運動を規制する決定的要因は社会的存在そのものであり、社会の運動を規制する法則も社会的存在それ自体にある。

チュチェ思想は社会の本質を人間と人間が過去蓄積した社会的富が社会的関係で結合したものとみる。

それでは社会のなかで、人間以外の要因である社会的富と人間との関係をどうみるべきであろうか。

社会の物質的・文化的富は人間が社会的歴史的に蓄積した富であり、そこには人間の自主性と創造性が体现されて

いる。したがってそれは会社の運動の物質的担当者として社会の一構成部分であり、自然にたいして主体的な社会を構成する一要因とみることができる。また社会的関係も、人間と富とに体现されている社会的生命力の統一的作用を保障する社会的存在の内部構造として社会的運動の主体である社会の性格を規定する主要な契機である。しかし社会的富は勿論人間そのものではなく、人間が過去に創造した遺産であり、人間がそれに準拠し制約されつつ活動する客観的条件である。

また社会的関係も、勿論人間ではなく、人間が取り結んだ人間と人間、人間と富との結合様式であり、その関係のもとで社会的人間が活動する客観的条件である。つまり社会的富や社会的関係は人間の客観的条件であり、社会的環境である。

したがって人間と社会的環境との相互関係においてはあくまでも人間が主体である。将来社会の発展が進むにつれ、人間が直接体现している自主的、創造的能力よりも富に体现されている社会の能力の方が比べようもなく大きくなることは明らかであろう。しかし、それでも社会的富の創造者はあくまでも人間であり、それは人間に奉仕してはじめて社会的存在としての役割を果すのである。それゆえ、社会的富が人間の活動に占める割合がいくら大きくなっても、主人の地位を占めるのはあくまでも人間であって社会的富ではない。

社会的関係についても同様である。社会的関係は人間の社会的地位と役割を規制する社会的秩序である。だからそれが人間の活動を制約する面が大きいことは事実である。しかし、社会的関係も人間がつくったものであり、人間に奉仕する使命になっている。それゆえ人間と社会的関係の相互関係においても、主人はあくまでも人間であって社会関係ではない。

だがこのことは人間がつねに社会的富と社会的関係の主人としての地位を占め、主人としての役割を立派に果たしてきたことを意味するものではない。

自然改造が進んでも社会改造や人間改造が遅れる場合には、人間は社会的富と社会的関係の主人として、その役割を充分に果たすことができず、かえってそれらが人間の活動を抑制する立場になってしまうこともある。しかしこのような事態は人間の本性に照らして決して正常なことではない。人間は当然、社会的富の主人として正しい社会関係をつくり出すべきである。人民大衆が社会の主人となった社会では、社会的富や社会的関係は人間の自主的で創造的な活動を妨げるのではなく、その強化に奉仕する。社会の発展が正常の場合は、人間の発展が富と社会的関係の発展に先行し、旧くなった富や社会的関係は、人間の創造的闘争によって人間の発展水準に照応して改造される。

このように人間は、自然に対して自主的な存在であるばかりではなく、社会的環境に対しても自主的な存在である。では、人間の活動を規定する決定的要因は一体何であろうか。

人間が自主的存在であるというのは、結局人間の活動を規制する決定的要因が人間の外にあるのではなく、人間そのものの中にあることを意味する。人間は、自己の行動を自己自身で決定する。しかしこれは決して、人間が法則になんら依存せず勝手気ままに行動することを意味するものではない。人間は自然環境と社会的条件に制約されて活動するのではあるが、何よりも自分自身の本質的屬性に基づいて行動する。人間が、自己の社会的本性に逆うような行動をするならば人間としての幸福を実現することはできない。人間の持つ社会的本性、これは人間の行動を規制する決定的要因である。

このように社会も物質的存在であり、物質的運動を行なう点においては、自然的存在と共通性をもっているが、し

かし社会は自主性、創造性、意識性をもつ物質的存在だという点で自然的存在と本質的と区別されるし、それ故またその運動においても自然の運動と区別される本質的な差異をもっているのである。

運動の性格は、運動する物質の特性によって規定される。社会的運動は自主的に、創造的に、目的意識的に行なわれる運動という点で、自然の運動と根本的に区別される。

社会的運動には一定の目的を達成するために主体的に運動を起こし、目的意識的に運動を推進する主体があるが、自然の運動にはそのような目的意識的に運動する主体がない。自然の運動にも勿論その運動の物質の担当者という意味での主体は存在する。しかし自然的存在は運動を自主的に起こし創造的に推し進める能力を持っていない。それゆえ自然の運動は主体による目的意識的な運動ではない。ただ社会的人間とその集団である社会のみが、自主的に、創造的に、目的意識的に運動を展開し、世界を改造する。目的意識的に運動を起こし、自主的に創造的に運動を推し進めて行く能力をもった物質的存在は、ただ社会的存在とその構成員としての人間だけである。社会的運動は、結局、社会的人間が主体となつて行なう運動である。

社会的運動の物質的担当者が何であるかを明らかにすることは、社会的運動の本質を解明する前提である。

社会的存在と社会的意識との関係を論議する人々は、社会的運動の担当者である物質そのものが何であるかをこれまで立ち入って解明しようとはしなかった。彼らは社会的運動を担当する物質の特殊な性質を明らかにすることなく、社会的運動の原動力である物質を、自然的存在としての物質一般として捉え、社会的存在と社会的意識の関係を存在と意識の問題一般に還元していたのである。このような立場はマルクスの唯物史観の側面にしかならない。

以上述べたようにチュチェ思想の歴史観が、これまでの歴史観とどのような点で異なり、どのような点が新しいの

かといえ、チュチェ思想の歴史観の特質は、それがチュチェ思想の人間観および哲学的原理と不可分に結びつき、それを基礎として展開されている人間中心の歴史観だという点にある。

金日成主席は次のように述べている。

「勤労人民大衆は歴史の主体であり、社会発展の原動力であります。人類の歴史は自主性のための勤労人民大衆の闘争の歴史であり、人民大衆の創造的活動によって歴史が發展し、社会運動が進められます。」（『金日成著作選集』、第七卷、四二二ページ）

ここで述べられているようにチュチェ思想は歴史と社会の主体および歴史と社会発展の原動力は勤労人民大衆であり、人類の歴史は、人民大衆の自主性のための闘争の歴史であり、創造的活動による発展の歴史である、とみるのである。すでにマルクスも「人間は自分で自分の歴史をつくる」（『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』）と述べているが、人民大衆が自主性を擁護し發展させるために、創造的活動によって社会を變革・改造・發展させるのは、このことが人民大衆みずからのしあわせであり生き甲斐だからである。したがって結局のところ、人類の歴史は人類がより幸せに生きることをめざしてきた歴史にほかならない。そしてこのことはまた歴史は人民大衆の地位の向上と役割の強化の歴史であることを意味する。

金正日書記は次のように述べている。

「自然と社会の改造をめざす人民大衆の闘争によって歴史は發展します。歴史が發展するというのは、すなわち歴史の主体としての人民大衆の地位と役割が強まることを意味します。」（『チュチェ思想について』）

すなわち人民大衆が歴史的にその自主性を擁護・發展させてきたということは、その自主的地位を強めてきたこと

であり、また人民大衆がその創造的活動によって歴史を發展させてきたということは、その創造的役割を強化してきただけのことである。

それゆえ歴史と社会の發展とは人間の自主性と創造性の發展の歴史であり、したがってまた自主的意識と創造的意識の發展の歴史であると同時に、歴史の主体である人間が、広くは世界における、そして狭くは社会におけるその地位と役割を向上させ、強化させ、發展させてきた歴史である。

崔仁秀氏は、その著書で大学生時代の金正日書記が社会發展の法則について従来の解釈の不十分性を指摘し、チュ・チェ思想の立場からの正しい見解を強調したことについて次のように述べている。

「金正日は、既存の理論が矛盾の法則を発見したことは不滅の意義を持つ大きな科学的・理論的業績ではあるが、その法則を社会發展に機械的に適用する問題については再考の余地がある、と述べた。そして容易に理解できるように、例をあげてつぎのように説明した。

すなわち、搾取社会では労働者階級と搾取階級のあいだに矛盾が存在し、その矛盾を克服する闘争を通して社会が發展するのは確かであるが、その闘争を組織し勝利に導いていくのは、あくまでも矛盾に満ちた社会を变革し先進的な社会を建設することに切実な利害關係をもつ労働者階級である。社会主義社会を例にとってみても、過去のあらゆる束縛から完全に脱しようとする人民大衆の高度の要求とその実現をめざす人民大衆の革新的な闘争、革新の党のまわりにかく結集した人民大衆の尽きせぬ力によって社会が發展するのである。社会發展の原因と原動力は、ほかならぬ社会發展の担当者であり、社会的運動の主体である人民大衆に求めるべきことである。それゆえ、社会發展の原因と動力は、發展を志向する運動の主体にあると見るべきである。今後、哲学で扱う社会發展の法則はこのような視

点から再検討されるときがあるものと思う……。

金正日の言葉には確信がみなぎっていた。運動の主体を社会発展の原因と原動力と見る見解、これは社会発展法則にたいする深奥な考察であり、一つの新しい発見を意味した。」(『人民の指導者、金正日書記』、雄山閣、一九八三年三月、二五〇ページ)

金日成主席は、人間の本質的特性を歴史上はじめて明らかにし、「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という人間中心の哲学的原理と、それにもついた人間中心の世界観を確立し、チュチュエ思想の人間観を基礎にして、チュチュエ思想の社会・歴史観を定立したのであるが、金正日書記は、主席が創始したチュチュエの社会・歴史観を整然と体系化し、その深奥な内容を明らかにした。

金正日書記は次のように述べている。

「チュチュエ思想は、歴史発展と社会革命の合法則性を明らかにした思想であります。チュチュエ思想によって、歴史を創造し発展させる勤労人民大衆の社会的運動、革命運動の根本原理が新たにせん明されました。

チュチュエ思想によって明らかにされた社会・歴史原理は、新しい社会・歴史観、チュチュエ史観であります。」(『チュチュエ思想について』)

チュチュエ史観を書記は右の論文で四つの基本原理に分けて説明している。

- ① 人民大衆は社会・歴史の主体である。
- ② 人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史である。
- ③ 社会・歴史的運動は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史である。

④ 革命闘争において決定的役割を果たすのは、人民大衆の自主的な思想意識である。

右の構成体系をみてもチュチェ史観が、世界の主人は人間であり、世界の支配者、改造者としての人間の地位と役割は、人間の自主性と創造性と意識性にもとづいているという人間中心の哲学の不可欠な構成部分であることがわかる。

五 チュチュ思想は観念論か

金日成主席の創始したチュチェ思想が人間中心の哲学であること、とくに思想・意識の役割を強調することに関連して、チュチェ思想が一種の観念論だとする影山氏の第五番目の批判も、以上述べたことからその不当なことがわかる。

影山氏のチュチェ思想批判で問題にしなければならない第五番目の論点は、思想・意識の役割をチュチェ思想は一面的に強調するのであるからチュチェ思想は観念論だという批判である。

氏は次のように述べている。

「チュチュ思想は、人間があらゆるものの主人でありすべてを決定するということをその哲学的原理とするものであるということについて、さきに述べた。ところで、『すべてを決定する』人間において、何が決定的な機能を發揮するのか。意識性が決定的なものであるとされる。さきに、人間の自主性、創造性を裏打ちし、その合目的な認識活動と実践活動とを保障するとされた意識性が、決定的な役割をになうとされているのである。『主体思想について』はいう、『もともと意識性は人間を世界でもっともすぐれた有力な存在にするもっとも高級な属性です』、『主席は、

革命闘争において人民大衆の自主的な思想・意識が決定的な役割を果たすという原理を新たに提示しました。思想・意識は人間のすべての行動を規制し調節・統制します』

もちろん、人間の意識のその思惟と思想が、人間のいっさいの自覚的な活動において、したがって、労働において、自然の改造や社会変革の活動において、積極的、能動的な役割を果たすことは、いうまでもない。しかし、意識はそもそも存在によって制約(*bedingen*)され、規定(*bestimmen*)されるのであり、意識は存在の反映(*widerspiegelung*)である。人間はその活動において、自覚的に客観的な法則性を科学的に認識しなければならない。いいかえれば、人間の活動は、その意識性をおして、自覚的に客観的な必然性(法則)と統一していなければならない。このようなものとして、人間の活動は、法則的、合目的で自由な活動でありうる。たとえば、核兵器の全面禁止・廃絶をめざす活動において、客観的な合法性への認識、確信が大切であり、不可欠であるとされるゆえんでもある。

チュチュエ思想において人間の意識性が論ぜられるときには、存在にたいするその能動性の側面が一面的に過大に強調されてくる。そのため、具体的な活動において、はなはだ一面的で、恣意的な主観主義があらわれてくる。それは、チュチュエ思想が、弁証法的・史的唯物論の基本命題をすでに古くなったものとし、『前提』とはいいいながらも、じつはそれをこえ出てチュチュエ(主体)とその意識を哲学の真に高い原理として別にうちたてることからくるのである。こうしてそれは観念論となる。くりかえしていえば、ここでは『前提』という語を一応用いておくことが、ほし いままにこれを越え出て反対物にさえ転化することを許す踏み台となっているようにみえるのである。』(二八〇—ページ)

「人民大衆が歴史の主体であり、その活動によって歴史が形成されるということは、その思想・意識が決定的な役

割を果たうこすといとと、ただちに同じではない。思想・意識は人間の活動にとってどれほど不可欠な本質的な契機をなすにしても、人間の活動のなから思想・意識の契機だけをとりだして、それが革命闘争、一般に歴史形成『史観』である以上、一般化されねばならぬだろう）において決定的な役割を果たすとみることは、主観主義的であるといえよう。それはとくに、社会の歴史的発展の客観的合法則性（土台から上部構造にいたるトータルな社会の発展の客観的合法則性）の認識から切り離され、これを越える新しい思想であると主張されるとき、歯止めを失って果てしない主観主義へと転落するのである。一般に、主体的および客観的、内적および外的な、諸条件のもとでの発展の合法則性についての科学的な研究と結びつかず、あるいはそれを拒否するところに主観主義的に主張される革命意識・革命思想が、冒險主義、一揆主義に落ちいるものであり、科学的社會主義と無縁なものであることは、近年のわが国における一連のニセ左翼の盲動においてわれわれの経験したところである。チュチュ思想におけるように、人間の活動から思想・意識だけをとりだして、その決定的な役割を一面的に強調することは、歯止めを失って果てしない主観主義へと転落することになる、とわたくしは考えるのである。」（一八四ページ）

しかし右のような影山氏によるチュチュ史観批判が、チュチュ史観の正しい理解に依拠するものでないことは明白である。とくにチュチュ思想を「近年のわが国における一連のニセ左翼の盲動」と同一視しての批判には、それこそ「主観主義」の典型をみせつけられるといわざるを得ない。

思想意識のもつ意義の重要さは今日ますます確証されている。

現代の発展した資本主義諸国において社会主義革命がいまだに勝利していないのは何故であろうか。それは一言でいえばこれらの諸国で全般的に自然改造にくらべて人間改造——その中心である思想意識——があまりにもたち遅れ

ているからである。人々の思想意識水準と物質的生活水準のあいだの著しい背離が、資本主義社会での人々の革命的意識をまひさせている。そのうえ支配階級はこのような状態をさらに助長させ、勤労大衆をますます資本主義的生活様式に染まらせ、かれらの革命意識を骨抜きにしようとか狡猾に愚民政策を実施しているからである。勤労者の思想意識、とくに政治意識を決定的に高めなくては、私たちの住むいわゆる先進資本主義国で革命の勝利を獲得することは不可能であろう。

現在発達した資本主義諸国では、生産力が発展し、勤労者の衣食住問題も解決され、表面的には民主主義的自由も保障されている。しかし発達した資本主義諸国は失業、慢性的過剰生産による不況などの多くの矛盾を抱えており、人々を墮落させている金銭至上主義と無原則な自由主義は、多くの問題を勤労者に投げかけている。私たちはこの社会の反動的本質を深く認識しなければならない。独占資本家階級は、人間の自主的で創造的な発展のために奉仕すべき物質的富当に独占しているばかりでなく、それを人間の墮落させ、従属させる武器に悪用している。

かつて、イギリス植民地主義者は、アフリカ人にキリストの聖書を読ませてからウィスキーをのませれば反抗を受けずにくらでも搾取することができると放言していたものである。

支配階級が最もおそれるのは勤労人民大衆が思想的に目覚めることであり、政治的能力を身につけることである。このため資本家歴史は、勤労人民大衆が専ら物質的な娯楽にふけり、社会における自己の地位と役割を思想的に自覚できないように策動しているのである。

とくに支配階級は、勤労者の内でも比較的富裕な階層を買収して中立化させ、かれを通して大衆の団結を破壊し、大衆の革命的進出を阻止しようと策動している。現在、資本家階級は、勤労者の中で安逸を求める風潮を助長し、退

廢的な生活様式と反動的な思想を拡め、政党、社会団体の上層部や学者などを大々的に買収し、勤労大衆を思想的に墮落させ、ノンポリ化するためのあらゆる手段と方法を巧妙に展開している。

過去、飢えと貧困、差別と暴力が人民をして自然発生的な反抗に立ち上らせた。しかしそのような環境の中での革命の成功は困難であった。同様に現在、発展した資本主義諸国では支配階級が人民大衆を墮落させるために狡猾に策動しているが、このような環境の下での革命の成功もやはり容易なことではない。それだけ経済力のある発達した資本主義諸国においては、支配階級の政治支配が強く、人民支配のやり方がより洗練されている。

したがってこうした国々においては革命的党の活動方法と活動水準もそれだけ高く創造的なものでなければならぬ。

労働者階級の党が、自己の力だけで資本家階級と闘おうとするのは無意味なことであり、かつ勝算のないことである。労働者階級の党の不敗の威力は、大衆と一体となって大衆を組織動員することからのみ生まれる。人民大衆に依拠して、人民大衆の力で問題を解決する方法が、まさに革命的方法である。大衆の力に依拠して人民大衆を動員して新社会を建設しようとはしないで、支配階級があらかじめ設定した路線を支配階級の政法体制の枠内で歩み、平和的方法で社会主義を実現しようというのは、結局、革命を放棄するということ以外の何ものでもない。議会を利用して闘うのは正しいが選挙だけで革命を行おうとする議会主義は誤りである。

革命は闘争に始まり闘争で終る。これが、革命の不変の法則である。闘争がなく、なんらの犠牲や代価も払わず「国会議員」の金バッジを胸につけ、赤いじゅうたんの上を胸を張って歩いているだけで革命ができるなら、誰も革命が困難な途であるとはいわないだろうし、革命家を尊敬する者など一人もいないであろう。

革命をやろうとする人は、敵にたいする幻想をすべて投げすて、革命的原則を守らなければならず、人民大衆を革命的に覚醒させ、組織し、かつ闘争をつうじて革命の勝利をなしとげなければならない。

資本主義が滅亡し、社会主義が勝利するのは動かすことのできない歴史発展の法則である。なぜなら歴史をつくるのは人民大衆であり、歴史の主体としての人民の自主性と創造性の発展がすなわち歴史の発展であるから、資本主義的搾取と帝国主義的植民主義およびあらゆる種類の支配主義に反対する人民の闘争は人間の本性の必然であり、人間の自主性を求める闘争が社会主義の勝利を歴史の法則としているからである。

勿論、資本主義から社会主義への移行の法則を自然法則のように理解し、人民大衆が何をしなくても社会はその方向に発展するなどというたわごとはチュチェ思想やマルクス主義とは無縁であり、社会の運動の主体を捕視した謬説にすぎない。

現代の先進資本主義諸国で、社会主義革命が成功しないのは以上にみた如く、人民大衆の思想意識の低さをその重要な原因としている。そして人民大衆の思想意識の向上に反対し、大衆を思想意識的に墮落させるために支配階級は全力を傾注している。現代日本のマスコミの果している役割、文部省の教科書検訂などを考えただけでもそれは明らかである。

チュチェ思想は、人間の行動の基礎としての思想意識の役割を正しく位置づけ、ブルジョア・イデオロギーの偽瞞を暴露し、労働者階級が真に社会の主人となる道を指し示しているのである。チュチェ思想は人間中心の哲学ではあるが決して観念論ではない。階級が真に社会の主人となる途を指し示しているのである。

チュチェ思想は人間中心の哲学なのであり、人間解放の思想であるが、決して観念ではない。チュチェ思想は観念

論でないばかりでなく、マルクス主義の唯物弁証法的世界観を継承し、これを人間中心の立場から独創的に、より深化發展させたところの最も徹底した唯物論的世界観である。

かつてチュチェ思想は人間中心の哲学であり、マルクス主義は物質中心の哲学であるという理解が一部にみられたが、このような解釈は正しくない。そもそもマルクス主義は観念論ではなく唯物論に依拠しているが、しかし物質中心の哲学などでは決してなく、勤労人民の幸福を何よりも願った偉大な人間解放の思想である。そしてチュチェ思想もまたマルクス主義と同様に唯物論に依拠しているが、とくに物質發展の最高の産物としての人間の本質を社会的属性としての自主性と創造性と意識性であると規定し、人間、勤労人民大衆はみずからの力によってみずからの幸福を実現しなければならぬとする人間中心の思想である。したがってチュチェ思想はマルクス・レーニン主義とともに唯物論をその共通の基盤としている。

この世界における最も根源的、永遠的、かつ普遍的なものは何であろうか。それは世界が物質から成り立っており、すべての物質は対立物の統一であり、絶えず変化・發展しているということである。

唯物論は、まず世界の根源は物質である、とみる。すなわち、世界は本質において物質であり、物質から成り立っている、とみる。物質はそれ自体の構造と性質をもっており、その性質にもとづいて運動し、変化し、發展している。

科たちは「唯物論」「弁証法」「弁証法的唯物論」「唯物弁証法」などの言葉をよく目にするが、これら四つの呼び名は正しい理解のもとでは全く同一の意味をもつものである。

そもそも唯物論は必然的に弁証法であり、弁証法は必然的に唯物論なのである。何故なら、物質は弁証法的に運動

し、弁証法的に運動するものは物質だからである。弁証法とは物質それ自体のもっている性質に基づく運動法則である。だから、唯物論は必然的に弁証法でなければならず、弁証法は必然的に唯物論でなければならない。そこで、さきの四つの名称はこのような意味で全く同一なのである。

歴史の発展の結果、世界の根源を窮極的に人間の頭脳の何らかの観念的産物（神、理念、精神など）に求める観念論と、事物を静止的にとらえ、不変性を物質の本性と考えた形而上学は、マルクス主義によって打破され、唯物論と弁証法は勝利した。

すべての物質は対立物の統一としての内部構造をもっているが故に矛盾的存在であり、すべての物質はその物質を構成している要素の矛盾的結合によって規定される性質に基づいて運動し、変化し、発展するが故に弁証法的である。

一八四〇年代マルクスとエンゲルスは唯物弁証法的世界観を確立した。弁証法的唯物論による世界の物質性と物質の変化・発展の法則の解明は、人々が世界を認識し改造するうえでの貢献であった。

人間はいまでもなく世界のなかで生きている。世界は自然と社会と人間から成り立っている。そして自然は物質であり、社会もマルクスが「第二の自然」と呼んだように、最も発展した物質的存在である。社会は、人間と社会的富が社会的関係によって結合して成立しており、基本的には人間の集団である。この社会を構成している人間も単なる自然的物質とは異なり、生命体（生命物質）であり、しかも意識をもった自主的・創造的な社会的存在であるが、しかし何よりも物質にほかならない。

私たちは、人間も物質であること、かつ最も発展した社会的性質をもっている物質であること、すなわち人間はこ

の世界における唯一の目的意識性をもっている主体的存在として、あらゆるものの主人であり、すべてを決定するという、世界にける特別な地位と役割をもつものであるということを認識しなければならない。そしてこのような世界で最も発達した存在である人間も、無生命物質から発展して今日の人類となったのである。このように、人間は何よりもまず物質にほかならないのである。それゆえ私たちは正しい物質観をもたねばならない。

正しい物質観を確立するということは、世界の一般的特徴についての正しい理解をもつということである。私たちの住む世界は自然と社会と人間から成っており、それらはいずれもみな発展段階を異にするとはいえ物質にほかならないのであるから、物質一般について理解することは、世界の一般的特徴を理解するということである。また私たちが物質についての理解を深めることは、私たち人間と私たちの社会が発展した物質であるので、無生命物質、生命物質、社会的人間、社会として発展してきた人間自身と社会を知るための前提である。そして私たち人間がそこから生まれ、その中で生存しているところの物質世界を正しく理解しなければ、人間と世界との関係問題を正しく理解することができない。すなわち、正しい物質観と人間観と社会観をもつことによって、初めて私たちは人間と世界との関係問題、つまり哲学の根本問題に解答を与えることができるのである。そして、人間が世界を知り、世界と自己の関係問題を正しく理解することなくしては、人間としての真の倅せな生き方を確立することはできないのである。

科学が教えているように、無生命物質のなかに生命物質を生み出す根拠、原因があり、発達した生命物質のなかに社会的存在としての人間を生み出す物質的前提が存在する。社会的存在としての人間は、進化論によっては説明できないが、進化論それ自体は誤りではなく、また動物世界のなかで最も進化した動物であったことが、動物的人間を社会的存在としての人間に転化させるための不可欠の前提だったのである。

社会的存在としての人間には、無生命物質、生命物質の特性がすべて含まれている。すなわち社会的存在である人間は、もつとも発展した存在であり、もつとも複雑な創造的な社会的運動を行う。がそれと同時に、人間は生物的要求を実現するために、生物的運動をも行う。のみならず、人間の肉体もやはり単純な物質の素粒子や原子、分子によって構成されているので、さまざまな物理的運動や化学的運動をも行うのである。

この世界の出来事は、人間の科学的知識や文化・芸術などのような高度な精神的な働きをも含めて、すべて物質の運動でないものはない。このような人間の高度の創造的な活動を、低次の、たとえば生物を構成する分子や、さらに原子や素粒子などの物理的・化学的運動に直接に還元して解釈しようとすることは誤りであるが、しかし私たちが知る限りの宇宙のすべての物質が人間をも含めて素粒子や、さらにはその構成子などの物質からできていることも事実である。

そこでまず私たちは、世界の一般的特徴として自然と社会と人間の共通項である物質そのものについて、知らなければならぬ。そして物質一般の性質、つまり世界の一般的特徴を理解したのち、この物質世界での特出した存在としての人間を考察し、次いでこの人間と社会的富が一定の社会的関係で結合している社会の考察への進まなければならない。すなわち発展段階を異にする物質の質的差異（無生命物質、生命物質、社会的存在としての人間、社会そのもの）を考察するためには、まじ物質世界の一般的特徴についての正しい理解が前提とされなければならないのである。なぜなら、すべての事物の考察にあたっては、一般的な基礎的な考察から特殊な具体的考察へと進まなければならないからである。

最高度に発達した物質であり、しかも単なる物質ではなく、社会的属性をその本質とする物質である人間とその社

会を考察するまえに、私たちは物質一般の性質から考察を始めなければならないのである。

もちろん現在の人類は多くの科学的成果をあげているとはいえ、まだまだ説明できない物質世界の謎を極めて多く残している。一例をあげよう。たとえば天文学者は望遠鏡を使って何億光年という超遠距離にある星雲を観察し、宇宙の最前線が「われわれの位置」から毎秒三〇万キロという速度で膨張し遠ざかっているのをみとめた。そして、一部の科学者は宇宙が百億光年の昔から膨張し続けてきたとすると、百億年の昔は宇宙はただの一点であったことになるとして、「宇宙は、この状態を出発点として、超爆発を始めたのであろう。原子も、星も、銀河系も、はたまた、空間や時間そのものも、その時に呱呱の声を挙げたのであろう」という結論を出したりもしている。しかし、もしこの説が正しいとするなら、宇宙が呱呱の声をあげる以前には時間も空間も物質もない、いわば「絶対無」の世界があったということになり、あらゆる物質はこの「絶対無」の世界から創造されたことになってしまう。これは「エネルギー・質量保存の法則」の否定であり、このような宇宙誕生論はやはり科学的偽装をまとった観念論にすぎないのである。

ではこの「ビッグ・バン」説に代わる科学的説明は何か。また宇宙膨張力の原動力は何か。まだ今日の科学はこれらの問題に正しい解答を与えていない。しかし私たちは私たちの現在の知識に基づき、まだ十分に理解することのできない宇宙の現象を絶対化して、結論を下してはならず、また神秘的に考えてもいけない。この宇宙の膨張の謎のように、私たちがまだ十分に説明することのできない問題は少なくない。

しかしマルクスが「問題が正しく提起されるなら、それは半ばは解決されたと同じである」と述べ、「人間は解決できる問題のみを問題とする」と述べているように、人間がその置かれたそれぞれの段階で、全く解決不可能の問題

を問題とすることは無意味であり、不生産的である。私たちが何らかの問題を問題とし、それを解決できるのは、その問題解決のための諸前提が整っているからである。

それゆえ私たちは、現代の科学が解決できない物質の謎、宇宙の無限の過去や無限の未来などについては、当面問題にする必要はないであろう。

この世界は単純な物質から複雑な物質へ、未発達な物質からより発達した物質へと発展してきた。そして最も発達した物質である人間はより未発達な物質をそれ自身のなかに包摂している。それゆえ私たちの物質についての考察も、まず一般的な基礎的な考察から特殊な具体的な考察へと進まなければならない、単純な物質の考察から、より複雑な物質の考察へと進まなくてはならない。

ところで私たちが単純な無生命物質を理解するにあたり、どのような方法があるだろうか。

私たちが単純な物質について理解する場合、最も発達した物質である人間から出発して物質の本質的性質を考察することが有益である。なぜなら発達した物質の性質は単純な物質でははっきりと認識することのできない萌芽的な性質を明らかに示しているからであり、それゆえ私たちは物質一般の考察から始める場合でも、その理解の仕方は最も発達した物質である人間の理解にもとづいて単純な物質の性質を認識するという方法をとるのであり、私たちはこのような方法に基づいて世界の一般的な特徴、すなわち無生命物質から生命物質、さらには人間をも含めた物質共通の本質的屬性を説明することが有益であると考える。

自然から生まれ、自然の奥恵を受け、さらに社会を形成して、自然と社会のなかで生きている私たち人間は、自然と社会をより深く認識し、自然と社会の発展法則を理解してこそ、自然と社会に支配される従属的存在としてではな

く、自然と社会の従属から脱して、自然と社会の主人として、自主的・創造的・意識的に生きることができると。

それゆえ最も発展した物質である人間と人間を取り巻く世界との関係問題を明らかにし、人間が自主的・創造的・意識的に生きるためには、正しい物質観は不可欠の前提であり、チュチュエ思想はその物質観のうえに人間観を樹立しているのであって、影山氏のような観念論ではない。

六 チュチュエ思想における「支配・奉仕のシエーマ」について

問題にしなければならない第六の点は、チュチュエ思想が、人間と世界とのあいだに支配・奉仕のシエーマをたてているという氏の批判である。すなわち「人間は世界を認識し、変革し、自己に奉仕させることによって生存し発展する」（傍点影山氏）という人間中心の思想について、氏は次のように述べる。

「前項の終わりの引用で『奉仕』の語にルビを付したがチュチュエ思想には、このように、人間と世界（自然と社会）とのあいだに支配・奉仕のシエーマがたてられているといえるだろう。『主体思想について』には次のような文章がある。『チュチュエ思想は自然と社会を支配する主人は誰であり、それを改造する力はどこにあるかという問題に解答を与えることによって、世界にたいする見解を明らかにしました。世界が人間によって支配される……』というのは、人間との関係において明らかにした世界にたいする新しい見解であります。『人間は世界の主人であるため、当然人間の利益の見地から世界に対応すべきです。人間が世界を認識し改造するのは、世界のあらゆるものを人間に奉仕させるためであります。世界でもっとも貴いものは人間であり、世界には人間の利益以上に大切なものはありません。世界のすべての事物は人間に奉仕する限りにおいて価値をもつものです。したがって人間のためによりりっぱに

奉仕させる見地で世界に対応するのは、世界にたいするもっとも正しい観点と立場できます。』。このようにして、『自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在である人間は、つまり世界唯一の支配者』であるとされる。人間は、世界で最も貴いがゆゑに、自分中心に他の一切を奉仕させるのでよい、というわけである（しかし、この考えは人間の傲慢なのではなからうか）。

たしかに科学的社会主義の古典にも、『自由とは、自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自己を支配すること（*Herrschaft*）である』とか、『いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範圍が、いまや人間の支配と統制（*Kontrolle*）に服する。人間は、自分自身の社会的結合の主人（*Herrn*）となるから』、またそうなることによって、いまやはじめて自然の意識的な、ほんとうの主人となる』とか書かれている（エンゲルス『反デューリング論』全集第二〇巻）。しかし、ここに書かれているのは、人間が自分自身の、そして自分自身の社会的結合の、主人となること、いいかえれば、人間が、いっさいの搾取と抑圧を揚棄して、十分に意識して自分の歴史を自分でつくること、したがって、理性的に自分自身を統制しながら、いっさいの社会的な敵対のない、いわゆる人間の本史を、そのときこそ創造してゆくこと、こういう展望を基礎にしている。そして、このことは、じつは、人間と自然との関係を支配・奉仕のシェーマ（人間が『世界の唯一の支配者』であるというようなシェーマ）でとらえるのではなく、むしろ労働・実践をとおして人間と自然とが一体（*Einus mit der natur*）となること、人間と自然との高い次元での調和をつくりあげてゆくことを意味している。エンゲルス『自然の弁証法』からの次の長い文章の引用を許されたい。『こうしてわれわれは、一歩すすむたびごとに次のことを思い知らされるのである。すなわち、われわれが自然を支配するのは、ある征服者がよそのある民族を支配するとか、なにか自然の外にあって自然を支配するとい

つたぐあいには支配するのではなく、——そうではなくてわれわれは肉と血と脳髓ことごとく自然のものであり、自然のただなかにあるのだということ、そして自然にたいするわれわれの支配はすべて、他のあらゆる被造物にもましてわれわれが自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しようという点にあるのだ、ということである』、『しかしそうしなければ、人間はますますまたもや自分が自然と一体であるということを感じるばかりか知るようになるのであるうし、また古典古代の没落以来ヨーロッパで抬頭して、キリスト教においてその最高度の完成を見た、あの精神と物質、人間と自然、魂と肉体との対立という不合理で反自然的な観念は、ますます不可能になってゆくであろう。』（一七九—八〇ページ）

以上のように影山氏は「人間は世界を認識し、変革し、自己に奉仕させることによって生存し発展する」というチュチェ思想の理解に対して、「この考えは傲慢なのではなかろうか」と批判を加えるのであるが、しかし事實は、物質発展の特出した存在である人間が、目的意識的に、能動的、主体的に世界のなかで生きている現実の姿がそこには明示されているのであって何ら傲慢ではない。逆に人間と世界の関係の正しい理解がここには示されているのである。そしてこのことは「人間と自然との高い次元での調和」を否定するものではない。高い次元での調和をつくるのも人間だということである。そもそもチュチェ思想でいう「主人」という用語についても誤解があつてはならない。チュチェ思想では「主人」という言葉がしばしば用いられているが、主人という言葉から受ける語感からすると、「人間はあらゆるものの主人である」とか、「世界を支配する主人の地位」などの表現に、多少なりとも反感いや違和感を受ける人がいるかも知れない。この点について、共和国の社会科学院が出版した『不滅のチュチェ思想』（一九八四年）は次のように述べている。

「日常生活において、主人という言葉はさまざまな意味でつかわれている。ある品物の持主を主人とよび、何らかの仕事を主管する人を主人とよぶこともある。また、奴隷や召使いは支配者を主人とよび、民族によっては、家庭で妻が夫を主人とよぶ。主人という言葉は客の対照語としてもつかわれている。このように、主人という言葉は所有関係、身分関係、家族関係など社会生活のさまざまな関係を表現する非常にはば広い意味を持つ言葉だといえる。

しかし、チュチュエ思想において、人間があらゆるものの主人だという時の主人という言葉は、このような一般的用語ではない。

チュチュエ哲学でもちいている主人という言葉は人間と、人間をとりまく周囲社会との関係において、人間がしめる地位をあらわす哲学的概念である。これはちょうど、物質という用語が化学や物理学の概念と哲学的概念とでことなるのと同じである。」(日本語版、(一三四—五ページ)

このようにチュチュエ思想における主人という概念は、世界に存在するいつさいの他の物質にくらべて、自主性、創造性、意識性をもつ人間だけが世界を改造し、自己の運命を開拓するのに決定的な地位を占め、役割を果たすということであらわしている言葉なのである。

同様に人間は世界を支配する主人であるという場合の「支配」という言葉にも他民族の支配者とか、政治的意味での支配者とか、経営者としての支配人とかというように、日常的に使われている言葉であり、他人の自由を束縛し抑圧するという意味で支配という言葉は使われている。しかしチュチュエ思想が世界と人間の関係で、人間が世界を支配すると言うのは、人間だけが世界を改造し自己の運命を開拓するのに決定的な地位を占め、役割を果たす存在だという意味でこの言葉を用いているのである。

影山氏が引用しているようにエンゲルスは『自然弁証法』のなかで次のように述べている。

「われわれが自然を支配するのは、ある征服者がよそのある民族を支配するとか、なにか自然の外にあって自然を支配するといったぐあいに支配するのではなく、——そうではなくてわれわれは肉と血と脳髓ごとく自然のものであり、自然のなだなかにあるのだということ、そして自然にたいするわれわれの支配はすべて、他のあらゆる被造物にもましてわれわれが自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しうるといふ点にある……。」

また『反デューリング論』のなかで、「自由とは、自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに自己を支配すること」であり、「いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。人間は、自分自身の社会的結合の主人となるからこそ、またそうなることによって、いまやはじめて自然の意識的な、ほんとうの主人となる」と述べている。

このように人間は自然の法則はもちろん、社会の法則をも認識し、自然と社会を改造するのであって、このような意味で人間が世界を支配する主人なのである。

七 チュチュ思想は共和国における唯一の思想体系であり、金日成主席は

人民に君臨し、個人崇拜されているという影山氏の批判について

最後に問題としなければならないのは、金日成主席が人民に君臨して個人崇拜されており、主席の創始したチュチュ思想が朝鮮民主主義人民共和国の唯一の思想体系であることについての氏の批判である。氏は次のように述べている。

「このチュチュエ思想は、金日成自身もいうように、『朝鮮労働党の唯一の思想体系なのであり、党の唯一思想の真髓をなす』（一九七〇年第五回大会での報告）とされるばかりでなく、それにもとづいて全社会のチュチュエ思想化、いいかえれば金日成主義化さえも唱導されている。

『主体思想について』は次のように書いている。『われわれにとって思想における全体性の確立とは、とりもなおさず、チュチュエ思想とその具現である党の路線を政策で武装し、党の唯一思想体系が確立することを意味します。全党と全社会に唯一思想体系がみなぎってこそ、思想において主体性が確立されたといえます』。全社会に唯一の思想体系がみなぎることとは、全社会をこれをもっておいつくすこと、すなわち、どんな異なる思想の存立する余地をも許さないことを意味する。だが、全党と全社会のこのような仕方での単一思想化は、極端な個人崇拜、それと不可分な官僚主義をまねくものであり、国民の思想・信条・言論の自由という民主主義の基本原則のまったく否定とならざるをえない。（一七三ページ）

「人民大衆が歴史において創造的な主体であるということは、しかし、かれらが唯一の思想体系をもつこと、社会に唯一の思想体系がみなぎることによって、保障されるものではない。いやまったくその反対である。社会に唯一の思想体系がみなぎるということは、社会を構成する諸個人の自由な思想形成、人格形成とは両立しない。今日、世界のどこの国、どこの民族のもとにあっても、それぞれの所与の歴史的諸条件のもとで、諸個人が個性豊かな自由な主体として相互的な人格形成をおこなうことが大切なことであり、科学的社会主義の哲学や教育学が、今日の諸条件のもとで生きる諸個人における『人格の全面的発達』を課頭として掲げているのは、そのためである。人間の尊重ということは、真の意味で、右のようにして相互的に形成される民主主義的な人間の尊厳の確認と、その発展を保障する

ことにほかならない。民主主義的な人間関係の基本的な諸条件としては、共感、寛容、相互承認、相互承認、相互保障が考えられ、したがってこれらは、連帯の民主主義的な内容となるのである。だが、全社会の唯一思想体系化ということは、上述のこととまったくあいられない。唯一の思想体系化は思想上の画一主義以外のなものでもなく、そもそもこれは人間の思想というものの本質と矛盾するものである。

しかるに『主体思想について』は次のように述べている。『われわれにとって思想における主体性の確立とは、とりもなおさずチュチュ思想とその具現である党の路線と政策で武装し、党の唯一思想体系を確立することを意味します。全党と全社会に唯一思想体系がみなぎってこそ、思想において主体性が確立されたと言えます』。

著作ではさらにつづけて、愛国的献身性と革命的熱意を高度に発揮することが説かれる。たしかに、事大主義は大国や先進国に隷従しこれを崇拜する奴隸的な屈従思想であり、自国と自民族を見下げ蔑視する民族虚無思想であり、これに反対して、主体性を確立することは大切である。これはいうまでもない。しかし、そのことは、全社会を唯一の思想体系で結束させようとはかり、党と指導者への限らない忠誠心、祖国と革命のために青春も生命も惜しみなく捧げる無私の犠牲的精神を説くことは、決して同一のことではない。だが、じっさいに、首領のために死ぬことを敢てする英雄賛美が前面に出てくる。著作は次のように書く。『たとえ生命を投げうっても党と指導者に最後まで忠誠をつくす覚悟に徹し、断頭台に立たされても革命的節操を守る人間、こうした人間こそがチュチュの革命観の確立した革命家です』。（一八七—八ページ）

そして影山氏は注として次のように言う。

「わたくしはここで十五年戦争を想起しないわけにはいかない。そのさいに、日本の多数の青年が戦地に駆りださ

れ、天皇のため、お国のために青春と生命を投げだして死んでいった。最大の戦犯の一人、東条英機とともに、かれらは靖国神社に神として祭られている。いま、中曽根首相は『靖国神社のようなものがなくて、だれが国に命を捧げるか』とか、『戦争を体験していない若い人は気の毎だ』とか、放言している。お国のために、あるいは最高の指導者のために、生命を投げ出せ、などという要求は、およそ人間的なものとはいえない。諸個人の平和的な生存こそが、まずもっていっさいの人間的なものの存立する基盤・根幹なのではなからうか。」(一八八ページ)

まず影山氏によるチュチュエ思想が唯一の思想体系とされている点の批判からみよう。氏はチュチュエ思想が唯一とされるのは「どんな異なる思想の存立する余地をも許さないことを意味する」し、「諸個人の自由な思想形成、人格形成とは両立しない」と断言されている。しかしこれほど理論的にも実際のにも誤った批判はない。

そのうえ驚くべきことに影山氏はチュチュエ思想が戦前の日本の天皇制のもとの軍国主義思想と同じようなものであり、天皇現人神思想と同じものであるかのように曲解しているが、これは全くの異論である。

チュチュエ思想は、これまでに何回も述べてきたように、簡単にいえば、人間がその本質に即して生きるための思想である。すなわち人間の自主性、創造性、意識性を十分に発揮し発展させ、搾取も抑圧もない理想の社会、共產主義社会を建設しようとする思想である。つまり人間の本当の幸せを実現するための人間本位の思想である。それゆえ、このようなチュチュエ思想を唯一の指導思想とすることは、人間のもつあらゆる可能性や能力を全面的に発揮・発展させるための社会をつくるということであり、それは真の民主主義の実現のための思想である。

チュチュエ思想はどんな異なる思想の存在も認めない思想などではなく、人間の幸せに役立つあらゆる思想に賛同する思想であり、諸個人の思想形成と両立しない思想ではなく、諸個人の正しい思想形成を全面的に認める思想であ

る。それゆえチュチュ思想は、人間の幸福や平和、思想、信仰、學問の自由などを阻害するものではなく、逆にそれらを全面的に支持する思想である。

例えば『朝鮮民主主義人民共和國憲法』の第五四条には、「公民は、信仰の自由と反宗教宣傳の自由を有する」と明記されている。チュチュ思想を唯一の指導思想とするということは、人間の幸せに役立つ一切の思想を支持し、人間を不幸にする一切の思想に反対するということであり、決して民主主義的原則に反するものでない。逆に民主主義的原則をおかす帝國主義者や支配階級の搾取思想はこれを拒否するのがチュチュ思想の立場である。

したがって「唯一」という言葉を形式的に、表面的に、無内容に理解して、これを戦前の天皇制イデオロギーとその本質において同一であるかのようにみる影山説には何らの真理も存在しないことは明白である。

チュチュ思想が何であるか、およびチュチュ思想を唯一の指導思想にするという共和国の方針の是非を判断するためには、チュチュ思想を真剣に学習し、この思想が人間の民主的要求や幸福を擁護し実現するものであるのか、それとも阻害するものであるのか、さらにチュチュ思想を唯一の指導思想としている朝鮮の内外政策が、朝鮮人民と世界の人民の眞の利益と要求にかなっているかどうかを具体的に考慮しなければならない。この点で、私自身も一九八〇年に初めて訪朝するまでは極めて共和国についての理解が乏しかった。私は第一回目の訪朝を出発点として真剣にチュチュ思想を学ぶようになり、訪朝以前にくらべると自分のチュチュ思想理解は深まったようである。私が何よりも確信しているのは、チュチュ思想が人間の幸せのための哲学だということであり、金日成主席が朝鮮人民と世界の人民の幸せを実現するための献身者だということである。

主席は「われわれが社会主義・共產主義社会を実現しようとするのは、働く者がみなすべてひとしく幸せに暮らすこ

とができるようにするためで、それ以外に何らの目的もないし、またあつてはなりません」と屢々述べているし、さらに「私がつともよろこびに感ずるのは人民の愛と信頼のなかに生きることであり、私のもつとも生き甲斐とするのは人民に服務することであります」と述べている。このような言葉のなかにですら。私たちはチュチェ思想の真髓と人民への献身者としての主席の姿を知ることができよう。

現在、日本語版の『金日成著作集』が出版されつつあり、また主席の伝記類も数種が出版されている。それらを学習するならば、影山氏の主張がナンセンスなことが判らう。今や金日成主席は人民に君臨する独裁者ではなく、人民と一つに結ばれた偉大な指導者であるとの評価は、全世界のチュチェ思想学習者をはじめとする良心的な人々のなかから高まっている。

また同様にチュチェ思想を指導思想とする朝鮮労働党の評価も高まっている。私たちは朝鮮労働党がどのような党であるかを知ることによつても影山氏のチュチェ思想批判がまったくの誤解であることを知るのである。^(注)

(注) ここであまりにも知られていない共和国を理解するために朝鮮労働党がどのような党であることを紹介しておく。

朝鮮労働党は金日成主席の指導のもとに創始された。

朝鮮労働党はその規約前文に明示されているように、チュチェ型の革命的なマルクス・レーニン主義党である。

主席は一九二六年、朝鮮における最初の共産主義的革命組織である打倒帝国主義同盟を結成し、長期にわたる抗日革命闘争を通じて党の組織的・思想的基礎をきずき、それにもとづいて朝鮮労働党を創立した。

朝鮮労働党は朝鮮の労働者階級と勤労大衆の前衛的・組織的部隊であり、勤労大衆のすべての組織のうち、最高の革命組織であり、朝鮮民族と朝鮮人民の利益を代表する。

朝鮮労働党は、金日成主席の革命思想、チュチェ思想を唯一の指導指針として国内的には主席によつて抗日革命闘争期にきずかれた革命伝統を継承し発展させ、国際的には国際共産主義運動と労働運動に現われは修正主義、教条主義をはじめあらゆる

る日和見主義とブルジョア思想に反対し、マルクス・レーニン主義の純潔を守るために断固としてたたかっている。

朝鮮労働党の当面の目的は、共和国北半部で社会主義の完全な勝利をかちとり全国的な範囲で民族解放人民民主主義革命の課題を遂行することであり、最高目的は全社会をチュチェ思想化し共産主義社会を建設することにある。

また朝鮮労働党は、南朝鮮からアメリカ帝国主義の侵略兵器を撤退させてその植民地支配を終わらせ、日本軍国主義の再侵略策動を粉砕するためにたたかい、社会の民主化と生存の権利のための南朝鮮人民のたたかいを積極的に支援し、自主、平和、民族大団結の原則にもとづいて朝鮮を統一し、国と民族の統一的發展のためにたたかっている。

朝鮮労働党は、自主性とプロレタリア国際主義の原則にもとづき社会主義諸国の団結と国際共産主義運動の団結を強化し、世界の新興勢力諸国人民との友好・協力関係を発展させ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ人民の反帝民族解放運動と資本主義諸国の労働者階級と人民の革命闘争を支援し、広範な統一戦線を結成してアメリカ帝国主義をはじめ帝国主義、支配主義に反対し、平和と民主主義、民族独立と社会主義の共同偉業のためにたたかっている。

朝鮮労働党規約で筆者が特別に強い感銘をうけたのは、△上級の命令を下級は無条件に実行しなくてはならないが、しかし唯一の例外がある、すなわち上級の命令が唯一思想であるチュチェ思想に反している場合である▽との趣旨が規定されている点である。

なお本稿執筆後、金日成主席はキムイルソン高級党学校創立四〇周年に際して講義録『朝鮮労働党建設の歴史的経緯』を一九八六年五月二一日に発表した。朝鮮労働党に指導される朝鮮民主主義人民共和国を理解するための必読文献である。